

琉球処分以降における 転換期の唐手に関する一考察

On Karate at a Turning Point After the Ryukyu Annexation

嘉手 莉 徹 豊嶋 建広 井下 佳織
Toru Kadekaru Tatehiro Toyoshima Kaori Inoshita

Abstract *The aim of this paper is to investigate how 唐手 (Toudi) was evaluated in society between 1879, when Okinawa Prefecture was established, and 1905 when Toudi was initially adopted as part of the gymnastics program at junior high schools in Okinawa. This attempt to clarify some aspects of Toudi after the Ryukyu Annexation is based on research using materials such as articles in Ryukyu Shinpo, the local newspaper, and educational magazines of that time.*

An examination of such documents reveals that the era was an important turning point for “Toudi” on its journey to becoming “Karate,” which is still written using the same characters, 唐手. Karate was, on one hand, condemned as “one of the customs that should be refined” under the assimilation educational policy of the Meiji Government. On the other hand, it was widely practised at local annual events and welcome parties for military personnel. Karate also found a place in school activities like farewell parties or sports meets of the Okinawa Prefecture Normal School.

キーワード：唐手、琉球国、琉球救国運動、沖縄の文化的アイデンティティ
学際領域：スポーツ人類学、空手道史

はじめに

空手道の呼称の変遷を見ると、近世琉球の唐手（トーディー）を基盤として、1879年の琉球処分以降に標準語で唐手（からて）の呼び名が使用された。1905年には、体操科の目的に沿うように指導法の研究や技法の体系化が進み、沖縄県では学校教育に導入された¹⁾。1930年代に流派が創設²⁾され始めると、空手道³⁾へと一般

1) 一記者：中学校職員の唐手、教育界、琉球新報、2面、1905年2月5日。

2) 宮城長順の弟子新里仁安が明治神宮奉納武道大会に出場した際に、流派名を聞かれ、答に窮したことを帰京後宮城に告げたところ宮城は、剛柔流と名づけた。新聞は新里の出場を報じている。（満場の観衆を感服させた唐手術の偉力、沖縄朝日新聞、3面、1930年11月11日）。また、宮城長順の手稿には「剛柔流拳法」が使用されている。（宮城長順：剛柔流拳法、手稿、1932年）。

3) 1929年、富名腰義珍を師範とする慶応大学空手研究会は、「空」の理念を主唱し、空手道への変更を明らかにした（下川五郎：「空」に就いて、拳、創刊号、慶應義塾空手研究会、1930年）。沖縄では、1936年琉球新報社主催の「空手座談会」において「空手道」への名称の統一を図った（名称を“空手”に統一し振興会を結成1、琉球新報、3面、1936年10月26日）。

化されていった。

沖縄県の設置後、他府県から来た県庁職員、教員らは琉球語が理解できないことから、沖縄では、同化教育としての標準語励行が強力に推し進められ、師範学校の創設以前に会話伝習所が設置された。また、県学務課は標準語教育のための『沖縄対話』を編さんした。これは、会話文を用いて、標準語と沖縄方言を対比させて標準語を指導するための教科書である。

言葉の問題は、琉球国時代の唐手（トーディー）が変容したことにも象徴的に表われている。県庁が進める教育施策によって、唐手（トーディー）は呼び名が変わり、近代沖縄において体操科として実施される体育や武術（武道）として近代化が促進されていったといえよう。

唐手（トーディー）から唐手（からて）についての変容の内実や近代沖縄において唐手（からて）がどのように体系化されていったのかについては、同時代の資料が乏しいことや琉球から沖縄への「世替わり」を反映して、明らかになっていないことが多い。

近世琉球における唐手（トーディー）に関する史料がどのように残されたのか、その全容をうかがい知ることはできず、今日わずかに確認されるだけである。1849年の首里城正殿改築後の祝賀行列に久米村人が唐手を披露していることを聞きとった山内盛彬の資料⁴⁾、また、1866年の尚泰王の冊封後、翌年に催された祝宴に用意された組踊の台本「二山和睦」⁵⁾や同年に催された久米村人による祝賀会のプログラム「三六九並諸芸番組」⁶⁾の3点において唐手の呼称が見られ、演じられたことを知ることができる。

これらの資料から類推すると、移管した尚家（国王家）の公文書資料、1945年に地上戦となった沖縄戦で多くの文物が消失、散逸した中に唐手に関わる資料も含まれていたのではないかと推察される。また、琉球処分後、旧士族を中心として琉球国の復国を図って、いわゆる琉球救国運動⁷⁾を展開していったことが当時の唐手家らに影響を及ぼし、中国由来の唐手の記録を残さなかったことも一考の余地がある。

空手道史を明らかにする上で、琉球処分以降、学校教育への導入までの時期は、近世琉球の唐手（トーディー）から近代沖縄の唐手（からて）へと質的に変容していく重要な時期とみることができる。

しかし、唐手（トーディー）から唐手（からて）が創造される間の約四半世紀に着眼して、その時期的な意義を問いただした研究は、これまでほとんどなされてい

4) 山内盛彬：10 王城落成祝の木遣（チャイ）音頭、山内盛彬著作集 第2巻、沖縄タイムス社、p. 202-205、1993年。

5) 筆者不明：二山和睦、組躍、1866年、那覇市歴史博物館所蔵

6) 筆者不明：三六九並諸芸番組、打花鼓、1967年（鳥袋全発遺稿集刊行事務局、鳥袋全発著作集、pp. 295-307、1956年）。

7) 西里喜行は、琉球処分後に琉球士族が中国（清）へ「処分反対運動」の政治亡命をさして、「脱清人」という用語があるが、これらの政治運動は琉球士族の意識の中では「琉球救国運動」が適しているとしてこの用語を用いている（西里喜行：まえがき、琉球救国請願書集成、武者英二：沖縄研究資料13、法政大学沖縄文化研究所、1992年。後多田敦：琉球救国運動—抗日の思想と行動—、出版舎、p. 16-17、2010年）。

ない。

本稿では、1879年の沖縄県設置後から1905年までの沖縄県中学校へ唐手が正式に導入されるまでに、唐手が社会的にどのような評価を受けていたのかを当時の地元で刊行された新聞『琉球新報』、教育関係雑誌『琉球教育』及び『龍潭』の記事を中心として考察を加え、唐手が質的な変容を遂げる転換期にあったことを明らかにすることを目的とした。

1 唐手（トーディー）の3つの側面

近世琉球の唐手（トーディー）は、全体像として3つの側面からとらえることができることを拙稿「手から『唐手』へ」⁸⁾で明らかにした（図1）。この全体像の把握は、琉球処分以降の唐手を考察する上で重要な観点といえよう。

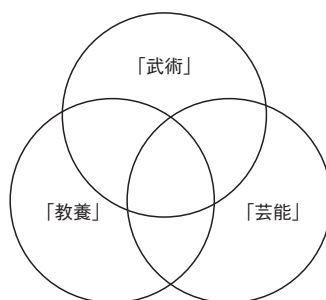


図1 近世琉球の士族の武芸

1つは、武術としての側面である。渡来してきた久米村人、冊封使節団との交流を行った琉球人、渡中の琉球人らによって、17世紀頃までには唐手（トーディー）と結びつく中国武術が伝播し、琉球独特の文化として継承されていった。その特徴は拳を徹底的に鍛えたり、その伝承の媒介には型があったことがうかがわれる。

2つは、王府の役人としての心構えや護身術として嗜まれる士族の教養としての側面である。

3つは、国事としての祝宴に供される芸能としての側面である。冊封体制下において、琉球国王が中国皇帝の冊封使によって国王に封ぜられた際の祝宴や首里城正殿改築の祝典に唐手は披露された。

琉球処分によって琉球国が解体されると、唐手（トーディー）の芸能的な側面や王府の役人としての教養的な側面は失われた。

8) 嘉手苺徹：「手」から「唐手」へ、島村幸一編：琉球 交差する歴史文化、柏書房、pp. 354-364、2014年。

2 近世琉球から近代沖縄へ

19世紀の半ば、欧米列強は東アジアへの進出を図り、琉球へたびたび訪れた。測量探査や修好、貿易を要求した。琉球は拒絶したが、イギリス、フランスは宣教師を送り込んだ。このような関与は琉球開国だけでなく、薩摩藩（日本）、清（中国）にとって領有権の含めた国際問題となった。しかし、イギリスと中国のアヘン戦争で中国が敗れ、日本も開国に至り、日本の幕藩体制は終焉して、中国の華夷秩序も崩壊することとなった。

日本は統一国家として、明治政府が成立し、琉球処分によって琉球王国は解体された。中国との朝貢・冊封関係に立脚していた沖縄では、旧士族を中心に復国を嘆願する琉球救国運動⁹⁾が展開された。嘆願書の作成から、密航船の操作、中国側役人との通訳、漢文の読み書きなどに携わる久米村人は重要な存在であり、旧首里士族とともに運動への関わりは大きかった¹⁰⁾。親清派の救国運動派は「頑固党」と呼ばれ、新体制派の「開化党」と激しく反目していった。しかし、1894年に日清戦争が勃発し、日本が勝利したことによって救国運動は終熄に向かっていったが、沖縄、日本、中国の関係が大きく変わる中、福州琉球館を拠点にした人的な往来は昭和戦前期まで続いていったのである。

王国時代においては、首里王府によって中国文化が積極的に導入されていったが、琉球処分後、中国文化に対する見方は一変した。唐手は、1900年代初等頃まで明治政府の同化教育において、改良されるべき風俗として扱われていた。

3 さげすまれる唐手

近代沖縄以降に、唐手のことが初めて記録で確認されるのは、教育関係雑誌『琉球教育』¹¹⁾の記事である。

「本会会員原国政勝氏の危難」¹²⁾と題する報告記事には、頑固派（頑固党）の旧首里士族約200名が王府時代の装束で首里城下の小学校前を示威活動で通った際に、小学校の子どもたちが行列の人々を冷やかし、このことを教師が止めなかったとして、参加する数十名が教員に対して暴力を振ったとする事件で、次のように記されている。

9) 西里喜行は、琉球処分後に琉球士族が中国（清）へ「処分反対運動」の政治亡命をさして、「脱清人」という用語があるが、これらの政治運動は琉球士族の意識の中では「琉球救国運動」が適しているとしてこの用語を用いている（西里喜行：まえがき、琉球救国請願書集成、武者英二：沖縄研究資料13、法政大学沖縄文化研究所、1992年。後多田敦：琉球救国運動—抗日の思想と行動—、出版舎、p. 16-17、2010年。

10) 赤嶺守：琉球処分と久米村、久米村—歴史と人物—、池宮正治・小渡清孝・田名真之、ひるぎ社、pp. 80-82、1993年。

11) 1895年に、沖縄県私立教育会の発刊した機関誌。論説、学術、雑録、彙報、文林、本会記事、広告などの各欄がある（照屋信治：近代沖縄教育と「沖縄人」意識の行方—沖縄県教育会機関誌『琉球教育』『沖縄教育』の研究—、溪水社、p. 9、2016年。

12) 原国政勝氏の危難、彙報、琉球教育 第4号、沖縄県教育会事務所、1896年（『琉球教育』復刻版、第1巻、本邦書籍、pp. 153-155、1980年）。

昨夏は復藩運動者（即ち琉球藩再興の運動者）を出し、最後に〈原国〉氏が此般の遭難を見るに至れり。願ふに一朝夕の故にあらざるべし。抑も本県の拳骨を弄するは、他府県に於ける撃劍、槍術なり。一名唐手と称す其の技術の目に於いては『PASSAI』『クウサンクン』『ナイハンチン』等の名ありて或琉球人士は古くより皆これを鍛錬し、以て有事に備ふる者即ち台湾土匪が学務部員を殺害セル槍棍及び刀劍と其用は毫も異なるところなし。県下に此輩の頑奴が今尚ほ跋扈跳梁して斯くの如き狼藉を為せり。真に危険と云わざるべからざる。原国氏は、県下那覇の人幸いに此の技術に通せり。故に辛じて性命を全うするを得たり。然れども数日の治療を経るにあらざれば肋骨の激痛は當に癒さざるべしと医師は之を診断せりと云ふ。因りて本会より慰問上を發し、且つ微品を贈呈せり（〈 〉は筆者加筆）。

教師に対する暴力事件が、頑固派の人々によって唐手を使ったことから、頑固派に対する非難と唐手を他府県の劍術や槍術に匹敵する武術と同じであるとして、台湾事件¹³⁾を例にあげて、原住民による琉球人の惨殺に槍、棍、刀を用いたことと何ら変わらないとして厳しく糾弾している。唐手の武術性について、「真に危険」と槍玉にあげている。『琉球教育』の筆者は政治的な立場から頑固派を糾弾しており、暴力を振るった旧士族の行動の事実関係は明らかではないが、唐手に対する見方は明らかに批判的である。

また、唐手の「技術の目」として、「PASSAI」「クウサンクン」「ナンハンチン」の型があげられている。琉球人士（琉球の士＝サムレー）は王国時代より型を学び、護身の術としていたとも述べている。

近代沖縄の社会状況を反映したこの事件は、4年後に中国（清）で宗教的な性格を帯びた武術集団の義和団が起こした排外運動を伝える同誌の報告記事にも「義和拳」¹⁴⁾の見出しで取り上げられている。

拳法（義和拳）の遠く本県即ち沖縄に流布せる鉄拳の如きは、或は之と同一の者に紛れなかるべしとある人は語り居れり。本県風俗改良の一端とも為すを得なければ渠れ義和拳と沖縄の鉄拳と其異同若くは弊害の有無は教育上宜しく心得居らざるべからざるなり。先年頑固の輩^{ヒヤウ}が原国前首里訓導に負傷せしめたることは、本県教育歴史に現存せり。此輩^{コノヒヤウ}が人に向て暴行せしむる鉄拳の罪ならむか。併し正宗の名刀も其持主の心^{ココろたしなみ}嗜一ツに依るべし。今一ツは支那的遊戯、鼓鑼打、綱引の如きは如何にも蛮風野俗あるを見る。漸次廃滅せむことを希望す。夫の垢面垢衣の下等人か身に垢臭を帯び喧憂を極むるか如き忽ち

13) 「1871年末に宮古島年貢運搬船が那覇からの帰途台湾に漂着、その乗組員54人が台湾原住民によって略奪・殺害されるという惨事（宮古島民遭難事件）がおきた。この殺害事件のいわば報復措置として、1874年日本がおこなった台湾出兵＝征台の役およびその終結にいたる、一連の軍事・外交の過程を台湾事件と称する」（金城正篤：台湾事件、沖縄大百科事典、沖縄タイムス社、p. 678、1983年）。

14) 義和拳、琉球教育、第55号、沖縄県私立教育会事務所、1900年10月28日（『琉球教育』復刻版、第6巻、本邦書籍、pp. 170-171、1980年）。

ひゃっきやぎょう
百鬼夜行の図を路上に描く等の事は真に忌はしき風俗なり（カッコは筆者加筆）。

義和拳と「沖縄の鉄拳」、すなわち唐手が同一のもので「風俗改良」に当たるとして、教育上、配慮すべきであると唱えている。先述の頑固派の暴力事件は、唐手を身につけていることに起因し、唐手という「風俗」をも問題にして、唐手の使い手は心得次第であると述べている。しかし、中国由来の遊戯、銅鑼打ち、綱引きは野蛮で廃止すべきであると記していることから沖縄の風俗、習慣などに対して蔑視する論調で示されているといえよう。頑固派への政治的な糾弾と中国由来の唐手に対して否定的な見方が色濃く反映していることがうかがわれる。

義和団事件について、同誌は「清国義和団の動乱」¹⁵⁾の見出しで報じてもいる。

尚ほ効く所に依れば義和団の徒党はよほど以前より北京に入り込み居りて銃眼を避くるの術と称して手拳^{てくぶし}又は唐手^{からて}などを揮り回はし、同国愚民を惑はし居れる由なれば俄かに斯る事態に立至りしも予て北京の内外に潜伏せる徒党一時に隆起して賊兵に与みせるか為めなるべしと云へり。

ここでも義和拳を沖縄における手拳や唐手と見立てて報じている。中国由来で琉球化した唐手を中国における賊兵が使う義和拳と同様の武術とし、手拳に「てくぶし」、唐手に「からて」の読み仮名を振っている。「てくぶし」は琉球語読みで唐手を意味している。唐手には標準語の読み仮名を付け、あえて両者を使い分けている。

また、復国運動の中心人物であった旧首里士族の浦添朝忠が日清戦争後に中国から帰国して、首里区字桃原（現那覇市首里桃原町）で行った私的な教育活動について、『琉球新報』は「頑固派の児童教育」¹⁶⁾の見出しで次のように報じている。

教育の必要は、流石の頑派連も多少気が付いたと見え、以前より同臭味の者共を語らひ、桃原なる浦添朝忠氏（旧按司家にして久しく清国に滞留し近年帰県せし同派の首領株）の邸内に集会し、7、8歳以上の学齡児童を勧誘し盛んに漢籍（四書類）算術習字唐手（支那流の柔術の？）などの諸科目を教授せり。講師は何つれの馬の骨やは知らされともに、2、3名許りもある由にて生徒も亦5、60名以上あり。勿論これは例の門閥階級を棚に上げて士農工商何れの子弟も入学せしむる規程なりと云ふ。また勉めて子弟の歡心を買はむ為ならむか時々腰弁当などを提げて景色好き場所へ引率し運動会、遠足などの企てもありといへば常に彼等にありなれたる飲み食い一方の会合とは些かと変調子の趣向といふへし。

15) 清国義和団の動乱、彙報、琉球教育 第54号、沖縄教育会事務所、1900年（『琉球教育』復刻版、第6巻、本邦書籍、pp. 136-137、1980年）。

16) 頑派の児童教育、琉球新報、2面、1898年6月13日。

浦添（頑派＝頑固派）は、自宅に学齡児童を集めて公教育に対抗して独自の教育を行った。教授内容は漢籍、算数、習字と唐手を指導している。新聞の論調は、教師の資格や入学の条件について疑問を呈し、浦添らの活動を報道している。唐手についても「支那流の柔術の？」と呼称の置き換えを行っている。『琉球教育』は、頑固派に対立する開化派の立場にあることから、記事の論調は浦添の活動に批判的である。

唐手の詳しい指導状況は不明だが、浦添らが私邸で行った集會に地域の学齡児童5、60名が参加しており、この時期に依然として頑固派に賛同する人々が多数いたことがうかがわれる。

また、辻遊郭¹⁷⁾内において50余歳の唐手指導者が弟子に掛け試し（腕試し）をさせている問題を、同紙は「乱暴漢の養成所」¹⁸⁾の見出しで報じた。

全く自己の腕試しの爲め無法を働く事と存候現ふ此等悪漢を集めて武芸を享受致候曲者は辻ウカンヌヒラーの、空井戸の上の小路より入りて奥に住める前里某といへる50余歳の老人に有之候。此老人は常々方々の無頼漢を自宅に集め支那手（柔術の如き者）を教授し1日1人より2錢宛の教授料を徴収して活計を立て其門人なる暴漢中にて武術の進歩したる者を夜々遊郭内の道に出して実地試験をなし他人と喧嘩を致させ候由にて聞も恐ろしき次第に御座候。

50余歳の人物は、唐手の指導によって金銭を徴収し生計を立て、遊郭街で弟子に唐手を使わせて掛け試しをさせ、稽古の成果を脇で見ているのである。「悪漢」を集め、暴力を振るう人物を生み出しているとされている。この記事では、唐手を「武芸」、「支那手（柔術の如き者）」といい、本来の呼称を使用していない。

ここで扱われる唐手は、暴力として使われた武術であり、生計を得るためのものであり、唐手の理念や有意義な面などは一切問われていない。

琉球処分以降、武術としての唐手は、暴力的に使用されたことが取り上げられ、教育者や新聞によって批判された。また、中国由来の理由から義和拳と同一視されたり、呼称の読み替えが表記されるなどして改良されるべき風俗として位置づけられていた。

4 地域に根づく唐手

しかし、唐手は一方では、地域の年中行事や軍人の歓迎会の演目して披露されてもいた。これは、琉球王国時代の芸能的な側面が地域に受け継がれていたと見ることができる。

首里綾門の伝統的な年中行事としての大綱引後に首里区字儀保（現那覇市首里儀

17) 遊郭が社交の場となっていた時代であり、唐手家らが「掛け試し」として唐手を通りすがりの猛者や唐手家同士が腕試しをした場所として口承や後の新聞時期などにも登場する。

18) 乱暴漢の養成所、掃きため、琉球新報、3面、1899年1月15日。

保町)で催された親睦会の模様を『琉球新報』は「綾上大綱引き後の大親睦会」¹⁹⁾との見出しで次のように報じている。

赤平の綱曳の翌日大仲、桃原は去14日に山川は去16日に何れも村大親睦会を開きたる由なるが、儀保は一昨17日国頭邸に於いて大親睦会を開き、老壯幼打交りて酒を酌みかはし、酒間壯快なる数番の演説あり余興には悲歌慷慨の剣舞あり勇壯なる支那流の武術を演ずるあり而して門内には綾上大道に於て名誉を得たる儀保特有の軍配扇形の旗頭を立て会中の人、意気天を突き歓笑の声四方に響きたりしと聞く。

唐手の呼称は、支那流の武術と置き換えて記されているが、地域行事の親睦会で演説や剣舞などとともに晴れの舞台の演目として、多くの観客の前で披露されている。

また、首里区字赤田(現那覇市首里赤田)で催された年中行事を同紙は、「赤田の弥勒」²⁰⁾の見出しで報じている。

首里区字赤田に於ては例年旧7月16日には豊作祈願の為め弥勒の躍りありしか本年は其の余興として某較へ(鑓の手)唐手(支那柔術)其他羽踊り杯の催しありとの事なれば見物人も余程雑沓を極むるならん。

赤田で催された豊作祈願の弥勒の躍りの後、余興として棒比べ(槍の手)、唐手(支那柔術)、羽踊り、杯の催し等が見物人がごった返す中で催されている。棒比べを槍の手と称し、唐手は支那柔術と報じられて公然と披露された。

日本で徴兵令が公布されたのは、1873年である。沖縄県で実施されたのは、他府県より遅れて1898年であった。那覇区字泊(現那覇市泊)の出身で陸軍教導団へ志願兵として採用され、台湾守備隊より広島21連隊へ再役交代の途次帰郷した軍人の歓迎会の様子を同紙は、「屋宜曹長の歓迎会」²¹⁾の見出しで次のように報じている。

会場なる小学校内には既に郡長代理、同字出身の中学生30余名、駐在巡查、曹長の父兄同字出身の現役兵、其他有志者等合して無慮400余名待受けて曹長を迎へたり頓がて名城政成氏は起て開会の趣旨を陳へたる後ち當日の正賓たる曹長は起て一同に挨拶して日清戦争の実歴談を最も沈着丁寧に演べて満場に感動を与え是より会員数番の演説了って酒宴に遷り余興には中学校生徒の撃剣と剣舞あり泊得意の唐手等ありしかば曹長は興に堪えずやありけん。

軍人の帰郷に際して地元泊では、その歓迎会に郡長、警察官、現役兵、泊出身の

19) 綾上大綱後の大親睦会、雑報、琉球新報、3面、1898年8月19日。

20) 赤田の弥勒、雑報、琉球新報、2面、1899年8月19日。

21) 屋宜曹長の歓迎会、雑報、琉球新報、2面、1899年10月21日。

中学生、その他有志等合わせて約400名が参加した。酒宴の余興として中学校生徒による撃剣、剣舞、そして泊得意の唐手が披露されている。同区の中学生在が唐手を継承し、嗜んでいることや同地区の唐手事情がうかがわれる。ここでは唐手の呼称の置き換えはない。

また、1904年の同紙には、「出征軍人及家族救護第一回剣舞大会」²²⁾の見出しで、次のように報じられた。

来ル十九日奥武山公園二於テ左ノ通り举行候條万障御操合セ奮テ御来会被下
度此段広告候也。明治三十七年四月十五日 沖繩義友会發起人高鳥貞 要項
一、期日及開会時限 来ル十九日(旧三月四日)(雨天順延)午後三時 炮一
発 但余興ハ午前十一時ヨリ開始ス 一、会場奥武山公園 本日ハ特二大弓射
的場ヲ設ケ、弓術ノ運動用ニ供ス 一、入場及入場料 入場ハ午前九時ヨリ入
場料ハ凡テ奥武山公園入口ニ於テ申受クベシ 大人金九銭小人金參銭ツ、 演
芸次第 一ハーリー 一沖繩手踊 一西洋奇術 一風月楼芸妓ノ狂言 一沖繩
唐手 一音楽 一開会炮一発 一福島將軍征露ノ唱歌 一剣術 一薩摩琵琶
一剣舞術 一閉会 午後七時炮一発以上。

沖繩義友会が有志を募って發起、催した出征軍人とその家族を救護する剣舞大会のプログラムでは、様々な演芸が行われ、「沖繩唐手」が含まれていることがわかる。唐手の呼称に沖繩を冠している。この時期には、唐手が広く地域行事で取り入れられていったことがうかがわれる。

5 学校行事で演じられる唐手

1902年3月に催された沖繩師範学校の卒業生送別会で、唐手が演目として披露された。校友会誌の「本会記事」²³⁾では、式次第と唐手に対する見方や演じる様子が紹介されている。

一 明治三十五年三月二十五日卒業生送別会順序左の如し 一 開会の趣旨
二 送詞 三 唱歌 四 唐手 五 福引 六 簡易科生の唱歌 七 発句 八 即
座演説 九 職員生徒の隠芸… 次は唐手是は本県人の専有物で有りて他県人の
真似し能はざる所にして子供の時より身守りとして練習し熟達すれば一撃以
て柱を折るに至る。選手は富川盛重、當眞恵徳、野原直吉、名嘉幸徳の諸氏に
して其身を据へ力を込め眼を凝らし時は猛獸の狂ひ来るが如く唯舌を巻くの外
なかりし中にも並里八蔵氏の魔術には誰一人拍手喝采せざるものなかりき。

唐手が同会の演目として送詩や唱歌や演説と取り入れられたことは、学校におけ

22) 出征軍人及家族救護第一回剣舞大会、琉球新報、3面、1904年4月15日。

23) 本会記事、龍潭、第1号、沖繩県師範学校内校友会、pp. 82-83、1902年。

る教員や生徒らの唐手に対する評価の転換点ととらえることができるのではないか。出演者は、富川盛重、當眞恵徳、野原直吉、名嘉幸徳の4名である。唐手を沖縄県人の専有物と位置づけ、沖縄出身者の誇りとしていることがうかがわれる。この記事以前に、学校で唐手が指導されたり、演じられた記録があったかどうかは不明だが、師範学校の送別会に唐手が採用されたのは注目に値する。卒業生は、教師となって指導に携わることになるからである。また、幼少の頃から護身術として嗜むと一撃で柱を折るほどで、演武は猛獣が襲いかかってくるようで、その迫力には驚かされると記している。

また、8月には同校の国頭郡出身の師範校の生徒と講習生によって行われた連合運動会の報告記事が「名護兼久ノ演技」²⁴⁾の見出しで掲載されている。運動会には、郡長をはじめ数十名の来賓があった。

我国頭郡ノ師範生ト講習生ト八月十三日連合シテ大運動会ヲ名護ニ開キ、各自ノ氣ヲ鼓スルト… 炎天ニ拘ハラズ見物人ハ周圍ニ人ノ山ヲ築キ近年希有ノ人出デ学生モ大人モ女モ男モ汗タラケニナリ所謂流汗瀧ヲナスト云フ …次ニ擊劍十組ヲヤツ内二組ハ来賓デ中ニハ日覺敷タツケタモノモアリ怒鳴テ相手ヲ驚愕サスルモノモアリ最終ノ無手勝流ナドハ拍手喝采デ送ラレタ之レガ済ムト直グ本県特有ノ相撲十組ヲ闘ハシ中ニハ四人ト仕合ツタ強力モ居ツタ運動會ハ之デ御仕舞ヲ告ゲテ散会シタ。

炎天にも関わらず、見物人は近年減多にない人出の中で、撃剣、沖縄相撲も行われ、演技の最終に行われた無手勝流としているのは唐手に間違いなく、演技は好評だったとみえ、拍手喝采で送られている。

師範学校では翌年の送別会でも唐手が披露され、「送別会」²⁵⁾の見出しで掲載されている。

本県人士獨占の芸たる唐手は始まりつ真栄城朝亮、知念三郎氏等の巧妙壯快なる手腕拍手の声百雷の落つるが如し次で今日正賓の一人たる上江洲由謹氏は上手にもあらず下手にもあらずと自白せる一種異様の唐手を巧みに演じて満場大笑を博し。

ここでも唐手は沖縄県人士の独占の芸であると誇らしく紹介され、真栄城朝亮、知念三郎、上江洲由謹らが演じて好評だったことがうかがわれる。

このような経緯を経て、唐手は沖縄県中学校に体育上、精神上の意義を見いだされるとして取り入れられていった。同紙に「中学校職員の唐手」²⁶⁾の見出しで次のように報じられている。

24) 名護兼久ノ演技、龍潭、第1号、沖縄県師範学校内学友会、pp. 81-82、1902年。

25) 送別会、龍潭、第2号、沖縄県師範学校学友会、pp. 145-146、1903年。

26) 中学校職員の唐手、教育界、琉球新報、2面、1905年2月5日。

昨年来同校職員は唐手に採るべきものあらんことを思ひ立ち、直ちに着手したるに今や其成績宜しく唯だ一の惜むべきことに教師の方にて秩序的の説明乏しき為め十分納得し兼ねる廉あれと何れ熟練を積むの後充分なる理由を教員にて発明せん計画なりと。我輩は希望す今の世国の如何を問はず有りとは有ゆる現象は之を把えて研究すれば技術上体育上精神上大に裨補する所あれば唐手の方も亦大に利益する所あるべし。吾輩は柔術に手を染めつゝある西洋人の未だ着手せざる先に、県下中学校にありて此事の起れるを大に喜ぶものなりと。他には教員自身の元気にも大に影響する所あるべきを信ず。

同校では、前年より職員で準備に着手し、研究を進めて体操科に振り替えるものとして導入していると考えられる。記者は、教師の説明が不十分で理解しづかったことを指摘しつつも、今後唐手が学校教育において技術・体育・精神上的の価値あるものになると記している。また、柔術を取り入れた西洋人が唐手に着手する前に、中学校に導入されたことを嬉しく思い、指導する教員にも大いに影響があると付け加えている。

むすび

近世琉球の唐手（トーディー）は、琉球処分後、琉球王国が解体されたことによって、士族の嗜みとしての教養としての側面や国事の祝宴に供される芸能的な側面を失うことになった。

本稿では、沖縄県で1893年に創刊された最古の『琉球新報』で戦禍を免れて残存する1898年以降から1905年頃までの唐手に関して記載された記事と教育関係雑誌の記事を取り上げている。

沖縄県になると唐手を取り巻く状況の変化を反映して、その評価も変容し、「さげすまれる唐手」「地域に根づく唐手」「学校行事で演じられる唐手」として記録されるようになった。

これまで確認された同時期の資料を考察した結果、この時期は近代沖縄において、唐手（からて）が創造されるまでの重要な転換期として位置づけられよう。唐手は、同化教育によって改良すべき風俗としてさげすまれる一方、地域の年中行事や軍人の歓迎会、出征軍人家族救護大会などで多くの人々に披露された。また、沖縄県師範学校の送別会や同校の運動会の演目として学校行事に取り入れられていった。

この状況は、唐手の呼称にも象徴されるように表れている。記事の中では、さげすまれたり、地域に根づく唐手は、支那流の武術、支那手、柔術の如きもの、支那柔術、手拳、無手勝流、沖縄唐手などと呼称が置き換えられることがほとんどであり、唐手に対する評価は定まっていない。しかし、学校行事の送別会や運動会に演じられる唐手は、「本県人の独占物」「本県人士独占の芸たる唐手」と沖縄県人の誇るべき演目として書き表されるようになっていった。

唐手の社会的な評価は、暴力的な武術や混乱した国情の中の中国拳法と比較して

さげすむ評価と、多くの観客が参加する晴れの地域行事・学行行事で演じられた尊ぶ評価が拮抗するように、唐手とは何かが模索されている様子がかがわれる。これは、中国と日本との関係、沖縄の置かれた状況を反映して、琉球化した中国由来の文化を蔑視し、風俗改良の教育が行われたことに要因があるといえよう。

唐手は、評価が揺らぎつつも沖縄の文化的アイデンティティを持つ運動文化として位置づけられるようになっていったことがうかがわれる。その後、沖縄県立中学校へ技術・体育・精神上の価値があるものとして導入されていった。

執筆者紹介

嘉手苺徹（かでかるとおる） 琉球大学非常勤講師。スポーツ人類学・武道学。
豊嶋建広（とよしまたてひろ） 麗澤大学経済学部教授。運動生理学・武道学。
井下佳織（いのしたかおり） 麗澤大学経済学部准教授。運動生理学・武道学。